

先端科学技術研究科 修士論文要旨

| | | | |
|--|---------------------------------|-----|--------------|
| 所属研究室 (主指導教員) | サイバネティクス・リアリティ工学 (清川 清 (教授)) | | |
| 学籍番号 | 2111102 | 提出日 | 令和 5年 1月 23日 |
| 学生氏名 | 窪田 太一 | | |
| 論文題目 | リアルタイム領き誇張システムが会話に与える影響に関する研究 | | |
| 要旨 | | | |
| <p>会話において、相互作用者のノンバーバル言語の模倣や同調傾向がしばしば観察される。このような模倣や同調傾向は、会話において常に観測されるのではなく、相互作用者の共感性や社会性などの要因により変化する。それゆえ、模倣や同調傾向は円滑なコミュニケーションの指標と見なされてきた。模倣または同調傾向が報告されているノンバーバル言語の中でも、領きは特に話者交代などの会話制御と密接な関わりがあり、円滑なコミュニケーションに大きく関与していると考えられている。しかし、話者の身体動作が伝わりづらいオンライン会話では、ノンバーバル言語の同調傾向が生じづらいことが報告されている。経験的事象からもオンライン会話では、互いの身体動作の伝わりづらさから相手の発言タイミングを把握できず、自身の発話タイミングと重なってしまい会話が中断される場面が度々見受けられる。そこで、私はオンライン会話で領きの同調傾向が生じづらいという問題を解決するため、カメラを用いて実際の話者の頭部をリアルタイムで角度を増幅させるよう誇張する「リアルタイム領き誇張システム」を提案し、本システムが会話に与える影響を調査した。実験では、本システムにおける領き誇張が会話に与える影響を、領きの回数と同期統計量、アンケート及び自由回答により評価した。その結果、領きの回数について、誇張倍率1.0倍、2.0倍のときと比べて、1.4倍のときに参加者の領きの総数が増える傾向が見られた。また、領きの同期統計量について、誇張倍率2.0倍のときと比べて、1.0倍と1.4倍のときに同期の位相差の標準偏差が小さくなる傾向が見られた。さらに、アンケートにおいては会話の印象や親密さ、共感性、理解度などを回答させたが有意差は見られなかった。インタビューにおいては、ほとんどの参加者は領きを誇張していたことに気づけなかった。このことから、本システムは話者に意識的な違いを認識させずに、領きの回数を増加させ、領きの同期を強められる可能性が示唆された。</p> | | | |